

**新たな「気分」を生きるための言葉**  
—ある一人の重度・重複障害者との関わりをもとに考える—  
**A Case Study of a Profoundly Retarded Person**  
— A Consideration about “Stimmung” and words —

遠藤 司  
Tsukasa ENDO

目 次

- はじめに
- I 対象者：「彼」について
- II 2013年12月の関わりの場面での彼の様子
- III ボルノウによる「気分」に関する考察
- IV 関わりの場面での彼の様子を改めて考える：3つの視点からの考察

はじめに

本論文は、一人の重度・重複障害者：「彼」との関わりの場面でおこったことを基に、彼の行動の意味を考察し、彼の生きていた世界の解明を試みつつ、関わりのあり方を探求した、実践的事例研究である。論をやや先取りして述べるならば、彼が1つの「気分」に支配されて生きている状態から新たな興味を見出し新たな「気分」を生きることができるようになる過程について、言葉を出すことにより他者と対話することの意味という視点から考察し解明することとなる。つまり、言葉で表現することは、ある「気分」に支配されて生きている1つの生き方を変える契機になりうることを、彼の行動や様子からわれわれは学ぶこととなるのであり、さらには、言葉で表現することの、関わりの場面の中での意味を改めて問うこととなるのである。

本論文では、ある日（2013年12月）の彼との関わりの場面に注目し、「気分」と「言葉」の問題について深く考えつつ、論を進めていくこととする。

I 対象者：「彼」について

(1) 関わり開始時の「彼」の様子

彼は、1982年生まれの男性である。筆者は、1995年に公益財団法人重複障害教育研究所の通所指導の場で、当時14才の「彼」と出会った。当時の彼は、自分で横向きになったり寝返りをうったりすること

等はできるものの、日常生活はほぼ全面的に介助を要する、いわゆる寝たきりの重障児であった。座位をとらせると、床に座る姿勢も、椅子に座る姿勢も、多少不安定になることはあるものの、ほぼ自力で保つことができた。また、自分の手に触れたものはつかむことができ、簡単なスイッチを押したりして操作することもできた。さらに、自分の手の周りにあるものを手探りで探すことも見られた。周りの人の声や音をよく聴いていて、それらに反応することもしばしば見られた。例えば、彼の名前を呼びかけると“はい”と答え、「これやってみる？」と訊くと、“うん”、“はい”などと答えてもいた(注1)。また、発音は若干不明瞭ではあるものの、他者の言葉の、特にリズムをその通りにまねをして声に出して言うこともあった。周りの人が、「すごいね」などと言うとうれしそうに笑っていた。しかし、少し難しい課題を提示され、それがなかなかできない時などは、イライラするように高い声を出し、身体全体に強い力を入れることもあった。感情表現は表情や声も含めて豊かであった。なお、視覚には重度の障害があるという診断がなされていた。実際に、彼が何かを見ることにより行動をおこしたり調整したりしていると判断できることは、少なくとも筆者との当時の関わりの場面では見られなかった。(注2)

以上のように彼を見ていた筆者は、自作の教材等を用い、彼に対して適切と考えられる課題を呈示し、彼との関わりを進めた。つまり、呈示された課題に彼自らが働きかけることができ、達成しようとする

ことができ、かつ、そのこと自体を楽しいと思えるような課題を呈示するよう努めることにより、彼との関わりの場面を作ったのである。彼との間で成立した課題の一部は、下記の通りである。

- ①筒抜き：棒にはまった状態の筒を抜き取る。
- ②枠抜き：四角や三角の枠に入った取っ手を形にそって動かして出口から抜き取る
- ③玉入れ：つかんでいるボール等のものを入れ物に入れる
- ④見本合わせ：見本と同じものを選び、“○○と○はオーナージ”、“○○と○○はチーガーウ”と言って確認する(注3)

## (2) 言葉で表現するに至るまでの学習の経緯

これらの学びの積み重ねをもとにして、2009年から、概念形成から記号操作をテーマとした、すなわち、文字や数字をテーマとした課題を提示するようになった。彼は不完全ながらも口頭で言葉を発することができたので、まずは、筒を抜いてそれにあたる数字を言ったり、選択肢の中から今の気持ちにあてはまる言葉を言ったりするよう促すことから始めた。さらに、ひらがなの文字の模型を筒につけて、その筒を順に抜いていくという、「あいうえお筒抜き」の課題を提示し(2008年9月から)、「あ」から順に文字のついた筒を抜いていったり、「あ」から「ん」まで筒が並んだ状態から一文字ずつ抜いて言葉を作ったりするを行った。彼は、筒を「あいうえお」の順番にそって抜き、さらには、筆者の促しに応じて「けーき」の「け」や「おちゃ」の「お」を選んで抜くことができるようになった。

また、口頭での言葉のやりとりで、その日の関わりの感想を言葉として述べることを促した。2009年6月の関わりでは、筆者が感想の言葉の選択肢として、「うれしい」、「たのしい」、「あたらしい」、「ない」を提示すると、彼は、“ない”と言った。その後の関わりの場面においても、“よかった”(2009年10月)、“やった”(2009年11月)等の言葉を言うようになった。他者の言葉を繰り返したり、決まった言葉を発したりすることが多かった彼にとって、筆者からの促しに応えるという形ではあるものの、問いかけに対してふさわしい言葉を発することができるようになったことは、彼が自らの言葉の世界を拡張、新たな世界を生きるようになったのを示すこと

であると、筆者はとらえたのである。

筆者は、この時期、これらのことと並行して、文字や数字を書くことを課題として提示した。彼は、2009年4月に、今日の感想としての「うれしい」という言葉を、筆者の支えを受けながらではあるものの、はじめてペンをもち紙にひらがなで書き、その後も例えば、2009年6月に「ない」等の言葉を書くなど、自らの言葉を紙にひらがなで書いたのである。しかしほどなく、彼は、ペンを持ち紙に書くことに対して極めて拒否的となり、筆者が彼の手にはペンを持たせて書かせようとする、身体に強い力を入れ、興奮し、怒りともとれるような様子を示すようになった。その後の関わりの場面でも課題として提示しようと試みたものの、彼はほぼ同じ様子を見せたので、書くことを課題として提示することは一旦止め、ひらがなの筒を抜いたり、口頭で言葉を発したりすることを中心に、言葉に関する課題を提示するようにした。

口頭での言葉のやりとりについては、その日の関わりの感想を述べるだけでなく、他の問いかけに対して答えることも成立するようになった。例えば、2010年11月に、関わりを見に来てくれた人に対して、訊きたいことの選択肢を「年齢」、「出身」、「勉強していること」と筆者が提示したところ、彼は“しゅっしん”と言った。その人が自分の出身地を言うと、うれしそうに笑っていた。あるいは、2011年5月に、関わりの感想として“たのしかった”を発した後に、「何が楽しかったですか」とさらに問いかけたところ、選択肢として提示された言葉、「ピアノ」、「文字(あいうえお)」、「数(何個ありますか)」の中から、“かず”と自分で言葉を発した。さらに、数の課題を硬貨を使って提示した回である2012年7月には、感想は“ない”と言ったものの、さらに足すように“おかね”と言った。硬貨を使った勉強が楽しかったかと問うと“ない”と答え、難しかった、大変だったかと訊くと、“はい”と答えた。

こうした言葉でのやりとりをする際に、彼は、私の問いかけに対し、ある一定の時間考えてから答えるようになった。また、他者からの問いかけに対して自分なりにしっかりと考えて答え、その答えを周りの人がきちんと聞いて反応することを喜ぶという様子を明らかに示すようになった。これらのことがおこった時期(2009年から2012年)は、彼の言葉の

世界の拡がりにとって極めて重要な時期であったと筆者は考えた。

2013年に入ると、彼の「書く」際の様子が明らかに変化してきた。彼は、書くことをさほど拒否しなくなり、彼自身がペンをもち、私がお手を手を助けて、彼がひらがなの文字を書くということが成立するようになった。2013年1月の関わりで、来てくれた人へのメッセージを書くことになったところ、彼は、「だいじょぶ」（翌日がテストだから心配であるという人に対して）と、それまでのように興奮したり怒ったりすることなく、考えながら書いた。2月には、「今日は何が楽しかったですか」に対して、「かすがたのしい」と自分で書いた。文章の形になった言葉を出したのは、筆者との関わりの中で初めてであった。さらに、3月には、メッセージカードを用いて、「あなたの〇〇が大好きです」に言葉を入れるという課題を提示したところ、見に来てくれたSさんについて、「やさしい」と書き、筆者については「つかれる」と書いた。また、「幸せは〇〇がつれてくる」という言葉については、「うた」と書いた。さらに、6月には、「あきらめずに信じて成長するから〇〇になれる」に言葉を入れるという課題を提示したところ、様々な人が出すヒント（せんせい、りっばなひと等）を聞きながら、「しあわせのひと」と書いた。筆者がさらに、「幸せの人とはどんな人ですか」と問いかけると、彼は、「みんないっしょ」と書き、さらに、「みんなでおなじく」と書いた。今日の感想に関しては、「みんなおもしろかった」（6月）であるとか、「すすすすぞだってね」（9月：見に来てくれた人に対して）、「ありがとうまたやりたい」（10月）である等、以前よりも明らかに表現が豊かに拡がっていることを示す言葉を多く出すようになった。これらのことが「書く」ことにより表現されたことを筆者は重視し、この時期から、口頭でのやりとりを行いながらではあるものの、主に「書く」ことにより彼の言葉を促すよう努めることとしたのである。

こうした経過の後に、彼と、2013年12月の関わり場面を迎えた。当時、彼は、31歳であり、筆者と出会ってから、17年が経過していた。この日の関わりにおいて、筆者は、それまでの彼との関わり場面では見ることのなかった彼の様子を見て、戸惑うとともに、その中で様々な示された彼の行動や様子

等について、深く考えさせられた。特に、言葉の拡がりをもたらす契機となったと判断していた「書く」ということが、それだけではとらえきれない意味をもつということ、改めて考えさせられたのである。以下、この日の関わり場面における彼の様子を記していくこととしたい。

## II 2013年12月の関わり場面での彼の様子

部屋に入ってきた彼は、いつも以上に緊張しているかのような様子に私（注4）には見えた。機嫌は決してよくはなく、あたかも怒っているかのように、「アー」、「イー」という大きな高い声を出していた。このようなことは今までの関わり場面でもあったのであるが、それらの時以上に緊張し、興奮し、気持ちがおさまらない様子であった。

彼のこのような様子を見た私は、すぐに学習に入るのは難しいと考え、まず、彼の好きな音楽をかけ、気持ちを落ち着かせようとした。音楽が流れると、彼はじっと聴き、少し落ち着いた様子を見せた。しばらく音楽を聞かせた後に、私は、改めて学習を始めようとして、「今日は何の勉強をしましょうか」と問いかけた。この時点で彼と行っていた学習は、「数の勉強：コインを使って数える」、「見本合わせ（“オーナー”の勉強）：タワシやスポンジなどを使って見本と同じものを選ぶ」、「筒抜き：複数の筒を数えながら順番に抜いていく」、「言葉の勉強：文字を書く」等々のものであった。私は、「数をやりますか」、「“オーナー”をやりますか」と、順次訊ねていった。いつもの彼であれば、これらの問いかけに対して、行いたい学習の名前を問いかけると、「はい」と応えてくれるのであるが、この日は、「アー」、「イー」と大きな高い声を再び出し、気持ちが落ち着かない様子を再び見せ始めた。

このままの状態では何も始めることができないと考えた私は、まずは「見本合わせ」の学習を提示して様子を見ることとした。この課題は、最近の学習の中で、彼が好んで行っていたものだったからである。私は、スポンジを見本とし、選択肢としてスポンジとタワシを提示して、スポンジを選ばせようとした。彼は、提示されたスポンジとタワシからどちらか一方を何度か選んでとった。しかし、見本と同じものを選ぶというよりも、むしろ、手に



触れたものをそのまま取っていたように私には見えた。彼が見本と同じスポンジを選び取った時に、私が彼の手をとって、「スポンジとスポンジで“オーナージ”」と確認のための言葉をかけようとするのであるが、彼は、再び体に力を入れ、緊張し、また興奮しているかのような大きな声を出し、身体に触れられるのを拒否するかのような反応を示した。私は、ここまで拒否的な彼の反応を見たことがなかったので、少なからぬ戸惑いをおぼえざるをえなかった。

この後、筒抜きや数の課題などを提示したのだが、彼の緊張や興奮はおさまらず、むしろより強くなっていくようであった。そこで、一旦学習を中断し、休憩をいれたり、音楽を聞かせたりして、彼の気持ちが落ち着くのを待とうとした。しかし、彼の緊張や興奮はなかなかおさまらず、この日はこのまま終了することを半ば覚悟した上で学習を再開した。

私は彼に、この日の感想として「言葉」を書くよう促すこととした。先述のように、ここ最近の関わりの場面において、彼は、様々な言葉をひらがなの文字で「書く」ようになり、そのことが彼の世界の拡がりをもたらししていると私は判断していた。さらに、彼が「書く」こと自体に極めて積極的に取り組んでいるようにも見えていたので、関わりの最後に、この日の感想という形で言葉を書くことを彼に促したのである。

彼は、いつもならばスムーズに自分から手を出してペンをつかもうとするのであるが、この日はなかなかペンをつかもうとしなかった。しかし、いくつかの文字を、私の支えを受けながらではあるものの、一緒に書いているうちに、少し落ち着いた様子を見せてきたので、私は、この日の彼の様子について訊ねることとした。

私はまず、「今日はなぜそんなに怒っているのですか」と問いかけた。この日彼は、音楽を聞いている時間以外は、ずっと体に力を入れて緊張し、興奮し、怒っているかのように見え、私を含めて周りで見ている人たちは、彼をなだめようとすることに終始していた。そこで私は、「怒っている」という表現で、彼のこの日の感じを問いかけたのである。

すると彼は、ペンをつかみはしたものの、手に力を入れて自分の方に引っ込めるようにしたり、ペンを放そうとして何度か持ち直そうとしたり、大きな

高い声を出したりして、なかなか手を前に出して文字を書きだそうとはしなかった。しかし、少しずつ自分の手に私の手が触れるのを受け入れるようになり、ペンを持った状態で手を前に出すようになり、ついには、ひらがなの文字を一文字ずつ書き出したのである。最終的に、彼は、「ちょうしわるい」と書いた。手に力がいつもよりも入っているせいか、紙にペンをたたきつけるように書き、また、引く力が強いので横向きの線をなかなかスムーズに書くことができなかったが、それでも彼の言葉として充分に読み取れる文字であった。



図1 彼の書いた言葉(1)「ちょうしわるい」

私は、「調子が悪かったんだ、そうだったんだ」と、彼の言葉を受け入れつつ、さらに、「何の調子が悪かったのですか」と問いかけた。彼は、この時も何度もペンを持ち直したり書き直したりしながら、最終的に、「からだ」と書いた。私は、「体の調子が悪かったんだ、そうか辛かったね、どんな風に調子が悪かったのかな、しんどいとか、だるいとか、痛いとか、いろいろあると思うけれども、どんな感じだったのかな」とさらに問いかけた。すると彼は、ここもしばらく考えた後に、「わからない」と書いた。

彼のこの言葉を見て、彼自身もよくわからないけれどもこの日は体の調子が悪かったというように彼が思っていることを私は了解し、このことについてさらに問いかけても、「わからない」以上のことを彼に考えさせることは難しいと判断した。そこで私は、この日の彼の状態について問うことを止め、「どうしてほしいですか」と改めて問いかけた。すると彼は、「ためないで」と書いた。彼のこの回答は、言葉としては明確で、彼がはっきりとこのように文

字を書いたことは私も周りで見ている人たちも理解できたのであるが、彼のこの言葉が何を意味するのかを理解することはできなかった。この言葉を見て、私は、「何をためないということなのかな」といろいろと問いかけてみた。この日の関わりりの前半のところでもストレスの話をしたり、あるいは関わりりの場面を通してトイレを訴えることがあったりするなどしたので、それらのことを表現した言葉であるのかと想像し問いかけてみたのであるが、明確な回答を彼から得ることはできなかった。

そこで私は、「遠藤は何をすればよいですか」と、問いかけをより具体的にした。すると彼は、「たのしいべんきょう」と書いた。この問いかけに対する言葉を書く時、彼は、穏やかな表情となり、手の力も抜け、落ち着いた感じになった。彼のこの落ち着きは、この問いかけになって突然にもたらされたというよりも、ここまでの問いかけと、それらに対する回答とを重ねることにより、徐々にもたらされたものであると私は感じていた。つまり、この日の彼の状態や、この後の希望などへの問いかけに対して文字を書いて言葉で答えることを重ねることにより、彼の緊張や興奮が収まってきて、普段通りの落ち着きを取り戻し、ついには、「たのしいべんきょう」と言葉を書いた時に、普段通りの彼の姿に戻ったと私は感じたのである。私はさらに、「今は何の勉強が一番楽しいですか」と問いかけたところ、彼は、「おはなし」と書いた。この時に行っていたような、私が問いかけ、あるいは言葉を促し、それらに彼が文字を書き言葉を出して答えることが、「楽しい勉強」であると彼は答えたのである。



図2 彼の書いた言葉(2):「めでとう」

私は、この日の最後に何をするかを彼に問いかけた。この日は2013年の最後の関わりりの場面であったので、「今年の最後の一言を書こう」であるとか、「今年の感想を書こう」であるとか、「来年の抱負を書こう」などと提案してみたのであるが、それらの全てに対して、彼は、“ない”と音声で応えた。しかし、この日周りで見ていた人にメッセージを書こうと提案したところ、これに対しては“はい”と力強く応え、「めでとう」(「課題を終えておめでとう」の意味)と文字で書いた。この時に至り、彼は、普段通りの穏やかな、かつ真剣な表情を示し、さらには、笑顔をすら見せた。彼のこの様子を見て、私は、最終的には普段の関わりりの場面での彼の様子を見ることができ、心から安堵したのである。

この日の関わりりの場面での彼の様子を見て、筆者は、彼の気持ちが彼の行動に大きな影響を及ぼしていたことを改めて感じた。はじめのうちは、彼の不快な気持ちがあまりにも強く、課題すら成立せず、学習の場面そのものが成立しなかった。しかし、この気持ちは最終的には落ち着き、他者へのお祝いのメッセージを自ら積極的に書くまでに至った。この日の関わりりの場面をともにした筆者にとって、前半で生きられていた彼の世界はどのようなものであったのか、後半ではどのような世界が生きられていたのか、生きられた世界が変わったとしたならばそれは何によりもたらされたのか、等々のことが、解明すべき課題として浮かび上がってきた。このことを解明することは、彼の成長を願いつつ関わりりをともにする筆者にとって、極めて重要なテーマであると考えられたからである。

以下、まずは予備的考察として、ボルノウが、ハイデガーの思索に沿いながら、著書『気分の本質』の中で展開した、「不安」の気分の解明に関する思索に学んでみたい。この日の彼の関わりりの場面における気持ちの部分の解明する際に、「気分」、あるいは「不安」という視点から考えていくことは極めて有効なことであると筆者は考えるからである。

### Ⅲ ボルノウによる「気分」に関する考察

ボルノウは、「気分」に関する考察を行うにあたり、まず、人間の精神生活を理解し解明するために、

従来、本質的な確信として信頼されていた理性への信頼が崩壊したことを示した上で以下のように述べる。

「精神作用は、その発生の根源でありその中にしっかりと根をおろしている生のより深い基盤にひきもどされた」(ボルノウ、1973、20)。

ここでボルノウが、精神作用の「発生の根源」、「生のより深い基盤」と表現した、精神生活全体の根源、基盤に位置するものこそが、「生の感情」であり、「気分」であった。

ボルノウは、「気分」について、まずこのように述べる。

「気分は、人間の最低の領域から最高の領域までを、全体的に一様に貫徹する根本的な状態を示すのであって、それは、その人間の活動全体に一定の固有の色あいを与える」(同上、20)。

「気分は人間存在全体の状態のようなものであり、また色調である」(同上、21)。

ボルノウが、「気分」を、「状態」、「色あい」、「色調」と表現したことにはどのような意味があるのだろうか。ボルノウは、さらに続けて次のように述べる。

「その状態や色調において、自我が一定の仕方で直接自我自身を知るのであるが、しかし、それらは決して何かそれらの外にあるものを指示するようなことはしない」(同上、21-22)。

この記述において、ボルノウは、「感情」と比較して、「気分」の特異性を示している。つまり、感情はつねに特定の対象に関連するものであるのに対して、「気分は決して一定の対象を持たない」(同上、21)のであり。「気分」の一つの形態であるところの「不安」についても、「人間がそれを不安が一定の対象をそこであげることはできないのであって、そのことによって恐怖から区別される。不安は対象に関しては全く無規定のままである」(同上、22)と述べるのである。

ここでボルノウが、「気分」を、ある事象や出来事等に対して生じたものである、あるいは、ある対象に特化した形で生じたものであるというとらえ方をしていないことを確認することは、「気分」をいかなるものとしてとらえるかということを考えていく上で、極めて重要な視点であると筆者は考える。なぜならば、本事例における彼の生きていた世界を

解明しようとする時に、もし、彼の「気分の悪さ」、あるいは「気持ちの悪さ」という「気分」がその根拠となっているならば、その「気分」が何によってもたらされたのかを考えることはさほど意味のないことであるということ、この時点でわれわれはボルノウから学ぶことができるからである。

ボルノウはさらに、人間の生がある気分にあることが、世界の見え方、あるいは世界の在り方までも規定するほどに、世界と根源的に統一的な関係にあることを指摘する。このことを彼は以下のように述べる。

「世界は、気分においては、意識の末期的諸形態、とりわけ認識におけるようにはまだ対象的にはなっておらず、気分はなお全く自己と世界の未分化の統一の中で生き、両者を共通の気分の色づけで完全に支配しているのである」(同上、25)。

「われわれは・・・人間と世界をともに包括する総体的な存在、特定の気分内容に満たされた存在を考えている」(同上、25)。

「気分は、理論的立場においては、・・・すでに姿を見せなくなった根源、つまり、純粹に理論的な立場から出発する限り発見することが出来なかった根源を、明らかにするのである」(同上、26)。

これらの記述に見られるように、ボルノウは、「自己と世界の未分化の統一」、「人間と世界をともに包括する総体的な存在」、「理論的な立場においてはすでに姿を見せなくなった根源」というような表現をもって、「気分」を、人間と世界とが根源的に統一的であるということ、これを明らかにするものであると述べている。つまり、「気分において開示される人間と世界の根源的統一の特徴」(同上、26)こそが、「気分」に注目することの意味であり、「気分」であることの意味であると述べているのである。

では、ここで述べられた「根源的統一」を、いかなるものとしてとらえればよいのであろうか。ボルノウはここで、「現存在そのものが常に気分づけられている」という、ハイデガーの思索を引きながら、人間の生における「気分」そのものの根源性について述べる。

「気分とは、必然的に不可欠な構成要素として人間の根源的な本質に属している」(同上、37)。

「原則として、一定の方法ですでに気分づけられていないような人間の生の状態は、存在しない」(同



上、37)。

「常に現存するこのような気分の層は、その他の精神生活の全部が展開する基盤であり、それによって精神生活がその本質において徹底的に規定されている」(同上、37)。

このようにボルノウは、「気分」のない人間の生は在ることすらないというほどに「基礎的」であることを述べ、さらには、それらの生活そのものを「規定する」とまで述べている。このことは何を意味するのであろうか。ボルノウはさらに以下のように述べる。

「ある一定の基礎的気分によって、ある種の体験が可能になっているのであり、また別の体験は、この気分の枠に合致しないので、最初から除外されているのである。かかる基礎的気分によって、個々の体験は、すべて完全に規定された方向へ導かれる」(同上、37-38)。

「心の中で、どのような高級な作用が展開できるかということ、また、その作用はどんな方法で展開するかということは、その時々支配的な気分の基礎に依存しているのである」(同上、38)。

「気分は、かくて、世界や生が人間に対して、いかに現れるかということに、はじめから制約を与えているのである」(同上、38-39)。

「気分が根源的なものであり、その気分の枠の中で、気分によって制約されて、はじめて個々のものの知覚は起る」(同上、40)。

「それぞれの気分において、すでに世界は全く確定した方法で『解釈』されているのであり、この気分の中での生や世界の根源的な解釈によって、すべての理解は最初からすでに指導されているのである」(同上、40)。

これらの記述の中で、ボルノウは、「気分」が、「体験を規定」ということ、「精神作用が気分依存する」ということ、「世界や生の現れを制約する」ということ、さらには、「気分」が「個々のものの知覚」を規定し、「世界の解釈」を指導することまで述べている。つまり、「気分」により、その時の体験の在り方、精神作用の在り方、知覚の在り方、解釈の仕方までもが、すなわち、人間の生の在り方そのものが、かなりの程度まで決定づけられるということを述べ、この意味で、「気分」は「基礎的」であり、「気分」と「世界」は根源的に結

びついているということを示しているのである。

「気分」が基礎的であり、「世界」と根源的に結びついているがゆえに、人間の体験そのものを規定し制約する。このことを、「ふさいだ気分」を例にして、具体的にボルノウは次のように述べる。

「ふさいだ気分状態が、いかに激しく人間をただ全く特定の悲しく不幸な体験に対してのみ扉を開き、他方、幸福な体験の領域に対しては、全く閉ざしているか・・・、またその結果いかに幸福の体験が全く人間に近づくことができなにか」(同上、39)。

「自己の憂いが自然の美に対して人間を閉ざす・・・ということが言われているだけでなく、この憂いは、同じく陰うつな新しい外界の印象との共鳴の中にのみ持続するのである」(同上、39)。

ボルノウはさらに、「気分」がこうした根源性、規定性をもつがゆえに、「悲しみや絶望している人の気分状態を直接晴れやかにする力を獲得することは、ほとんど不可能である」(同上、40)と述べる。確かに、「気分」によって、あらゆる体験や、外界の知覚や、人間の生そのものが規定されるのであるならば、さらには、他の「気分」を生きることによってのみ体験できるものは体験できないのであるならば、1つの「気分」を生きている人間が、その「気分」を変える、あるいは、その「気分」から離れることは不可能なことに考えられる。

しかし、ボルノウはさらにこうも述べる。

「(悲しみや絶望している人の気分状態を直接晴れやかにすることは)せいぜい、しかるべき主観に何か別のことによって、その人の注意をひきつけることができるという廻り道によって可能であるにすぎない。しかし、苦悩の間は休止しているように見えた彼の興味を、ふたたび何かに対してよびさますということには確かに成功しているのであり、従って、それによってすでに決定的な処置が講じられたのである。このよびさまされた興味によって、新しい開かれた気分が広まり、そこで必然的に苦しみが解消されるからである」(同上、40、括弧内は筆者による)。

この記述の前半、ボルノウは、「ふさいだ気分」や「陰うつな気分」が直接晴れることはないという考えを記述しているが、後半では、新たな興味をよ

びさますことにより、「新しい開かれた気分」が生まれ、苦しみが消されるとも述べている。つまり、直接的に「気分」が変わることは困難であるとしても、新たな見方、物事に対する興味が起これば、今までの「気分」も変わり得るということを示しているのである。

ふさいだ、陰うつな、苦しい、悲しい「気分」を変えるために何をなすべきかについて、本研究では後に考察することとなる。なぜならば、本事例における彼の様子について、特に、関わりの後半場面での様子について考察し、彼の生きた世界を解明する上で、上記の事柄は、極めて重要な意味をもつこととなるからである。

さらに、「不安」について、ボルノウがいかなる考察をしているかについて、簡単に触れておきたい。ボルノウは、ハイデガーの思索に依りつつ、この問題について記している。つまり、ハイデガーが著書『存在と時間』で述べたように、「不安」という「気分」を、現存在の「根本情態」とする(注5)考えに依り、「不安は・・・ある完全に形づくられた根本的情調性一般を保証している」(同上、49)と述べる。さらには、これもハイデガーの思索に依りつつ、「無」、あるいは「不気味さ」と関連させつつ、こうも述べている。

「不安は、人間が彼を信ずるすべての関係から切り離し、その他の場合には人間を安全に支えている世界を、ほとんど消滅させてしまう。その結果、恐ろしく圧迫してくる見捨てられた状態を経験することによって、人間のまわりに無が生ずるのである。現存在一般の不気味さと安らぎのなさが、このような不安の無の中に立ち現れる」(同上、54)。

このようになると、人間の精神作用、生の在り方は、下記のようにしか述べることができなくなる。

「不安や絶望においては、・・・本来の気分のこの均斉のとれた振動が攪乱されている。あたかもここでは気分一般がこわされているかのようである」(同上、33)。

「不安や絶望においては、生命感情が全体的に支離滅裂なのである」(同上、33)。

こうした「気分」の状態においては、世界はどのように見え、どのように体験されるのか、容易に想像できる。あるいは、見ることにすらできず、体験すら成立しないのかもしれない。こうした状態にある

人に対して、どのように接するべきかを考えることは、障害の重い人との関わり場面を担う人間の重要な責務であると筆者は考える。

以上、ボルノウの著書『気分の本質』に依りながら、「気分」について考察を進めてきた。「気分」は人間存在の基礎となっていること、1つの「気分」が、人間の生の在り方、体験の仕方すら決めてしまいかねないということ、「気分」を変えることは不可能であるにしても、新たな興味を開くことにより新たな気分が開かれることは考えられること等々のことを、ボルノウの思索から学ぶことができた。

これらの学びを基に、2013年12月の関わり場面における彼の様子について改めて考えたい。その際、下記の3つの視点を基に、考察を進めていく。

- 1 関わり場面における彼の様子の変化の過程を「気分」という視点から改めてとらえ直す
- 2 彼の様子の変化がもたらされた理由を「言葉」という視点から改めてとらえ直す
- 3 障害の重い人との関わり手であろうとする人間としてこの事例を改めてとらえ直す

#### IV 関わり場面での彼の様子について改めて考える：3つの視点からの考察

##### 1 第一の視点：関わり場面における彼の様子の変化の過程を「気分」という視点から改めてとらえ直す

この日の関わり場面において、彼は明らかに、「悪い気分」を生きていた。この気分を生きることにより、彼の世界は制約され、世界の見え方も限定されていた。

ここでいう「悪い気分」を、仮に、「不安」ととらえてみる。もし彼が、「不安」を生きていたとするならば、ボルノウの言うように、「安全に支えている世界をほとんど消滅させてしまう」状態を生き、かつ、「気分一般がこわされ」、「支離滅裂」になってしまっている状態を生きていたと考えられる。したがって、今までの関わり場面でも成立していた生そのものが、すなわち、諸々の課題も、筆者との会話も、楽しかったことも、それらの全てが脅かされ、成り立たなくなってしまう。音楽を聞いている時のみ、少し落ち着くことができたが、



それも一時的なものであり、音楽が終わるとまたもとの「悪い気分」に戻っていた。彼のその時の生の基礎的部分をなす根本的気分を変えるだけの力を、音楽は持ち得ていなかったのである。

しかし、最終的に、この日の関わりの場面で、彼の「悪い気分」に基づく諸々の行動、様子は明らかに変わった。少なくとも、「悪い気分」に基づく諸々の行動、様子は見られなくなり、筆者との関わりの場面における通常の彼の様子が見られるようになった。先述のように、彼の様子が変わったのは、筆者の問いかけに、彼がひらがなの文字を書き言葉で答えた場面からであった。彼は、筆者が問いかけ始めた時は、「悪い気分」を生きながらではあるものの、まずは「ちょうしわるい」という文字を書いて言葉を出し、「からだ」、「わからない」、「ためないで」と文字を書き言葉を出していくうちに、徐々に通常の彼の様子を示すようになった。さらに、「たのしいべんきょう」、「おはなし」と言葉を出した時には、身体の力の入れ方、表情、声の出し方等は落ち着いて、ついには笑顔すら浮かべるようになった。「悪い気分」が変わり、新たな「気分」を生きようになったとすら筆者には見えたのである。

先述のボルノウの言を借りるならば、「悲しみや絶望している人の気分状態を直接晴れやかにする力を獲得することは、ほとんど不可能である」（ボルノウ、1973、40）。そうであるならば、彼の「悪い気分」も、気分が「変わった」と表現することはできない。関わりの場面での彼の「悪い気分」は、直接晴れやかにされたわけでもなく、直接変わったというわけでもない。しかし一方で、ボルノウは、「苦悩の間は休止しているように見えた彼の興味を、再び何かに対してよびさます」ことは可能であると述べ、さらに、「このよびさまされた興味によって、新しい開かれた気分が広まり、そこで必然的に苦しみが解消される」とも述べていた（同上、40）。そうであるならば、「悪い気分」でいた時の彼には見えていなかった新たな興味を、筆者との会話を通して、自らが文字を書き言葉を出すことによりよびさますことはできていたはずである。「悪い気分」が直接変わったのではなく、「悪い気分」でいながらも新たな興味をもつことにより、言い換えるならば、「悪い気分」により制約されていた世界の見え方を

少し変えるような働きかけを受け入れることにより引き起こされる新たな気分を、少しずつではあるものの生きることができるようになった。そして、これらのことを引き起こしたのは、彼自身が「言葉を出す」ということであったのである。

彼の抱いていた「悪い気分」が、「不安」や「絶望」というようなものであるならば、ボルノウが、あるいはハイデガーがいうように、「根本情態」というものであるならば、「言葉を出す」ことにより引き起こされた新たな「気分」を生きることも、一時的なものであるのかもしれない。しかしながら、彼の「悪い気分」を一時的であったとしても解消し、異なる「気分」を生き、それにより新たな言葉による学びを成立させることは、彼の生にとって極めて意味のあることと筆者は考えるのである。

以上、関わりの場面での彼の様子の変化の過程について、「気分」という視点から改めてとらえ直してみた。こうした過程をともにしたことの意味を考えるために、彼のこの様子の変化の過程が、何によりもたらされたのかということについて、改めて考えなければならない。以下、この問題について、さらに考察を進めていく。

## 2 第二の視点：彼の様子の変化がもたらされた理由を「言葉」という視点から改めてとらえ直す

なぜ彼の「悪い気分」は変わったのであろうか。より正確にいうならば、彼が、「悪い気分」を生きている状態から、新たな興味がよびさまされたことにより、一時的であったにせよ、新たな「気分」が開かれたのはなぜだったのであろうか。新たな「気分」が開かれる過程があるとしたならば、その過程をどのようにとらえればよいのであろうか。これらの問題について、以下、考察を進めていきたい。

新たな「気分」が開かれた契機となったことは、明らかに、ひらがなの文字を書き、「言葉を出した」ことであろう。言葉での会話ややりとり等は、彼が、「悪い気分」を生きている時は全く成立しなかった。通常ならば、筆者との関わりの場面において、「筒抜きをやってみますか」等の筆者の問いかけに対して、「はい」、「ない」等の音声言語で彼は答えていた。しかし、この日は、そのやりとりすらほとんど成立しなかった。「ない」と言うことはあったとしても、彼の言い方は通常のものとは全く異なり、

体に力を入れ、不快そうな大きな声で、叫ぶように言っていた。つまり、筆者からの彼に対する口頭の問いかけは、「悪い気分」を生きている彼に新たな興味をよびさまし新たな気分を引き起こすことはできなかったのである。

しかし、筆者の問いかけに対して文字を書き言葉を出すことにより、彼の様子は明らかに変わった。ここで改めて、筆者の問いかけと彼の出した答としての言葉について見直してみたい。

筆者はまず、「なぜそんなに怒っているのですか」と問いかけた。筆者はこの時、彼の様子を「怒り」の現われとしてとらえていたからである。もし、彼の様子が「気分」によるものであるならば、この問いかけは答えることが極めて難しい、というよりも答えることが不可能な問いかけであった。なぜならば、「気分」には明確な「対象」は存在しないからであり、そうなった「理由」も存在しないと考えられるからである。

しかし、彼は、しばらくの時間をかけて考え、力が入ってしまっている身体を何とか駆使して、「ちょうしわるい」という言葉を書いた。この言葉は、筆者からの質問に対する答として成立しているとは必ずしも言えない。なぜならば、この言葉はこの時の彼の様子の理由を示す言葉とはなっていないからである。しかし、彼は、少なくとも自分の状態を1つの言葉として出し、やりとりを成立させた。全くやりとりが成立していない「悪い気分」でいる状態から、問いかけに対して答えようという意識が生じるほどの「気分」が開かれかけたのである。

さらに、「何の調子が悪いのですか」という筆者の問いかけに対し、「からだ」と答えた。ここにおいて、1つの「対象」が現われた。根源的、基礎的気分が覆われ、世界が制限され、対象の現われすら限られたものになっていたほどの状態からは、少しではあるものの脱していると考えられるようになった。この時の彼は、自らの「からだ」を対象化し意識を向けることにより、どうしようもない「悪い気分」に支配された状態から、少なくとも新たな「気分」が開かれかけた状態に向かっていたのである。

その後の、「体がどのように調子が悪いのですか」や、「どうしてほしいのですか」という筆者の問い

かけに対しては、それぞれ、「わからない」、「ためないで」という言葉を答として出した。筆者としては、「からだ」という対象が現われたことを受けて、その対象を明確化し、それに意識を向けることにより、さらによい状態になることを願いつつ、これらの問いかけを行ったのだが、彼が出した言葉は、「わからない」という、彼自身にもわからないというものであり、「ためないで」という、何を意味するのかが必ずしもわからないものであった。彼が出した言葉である「からだ」という対象をさらに明確化するという筆者の意図は、成立しなかったと考えられる。しかし、こうしたやりとりをしている最中、彼の様子は「悪い気分」に支配されている状態から、次第にやりとりに集中する様子を見せるようになっていった。つまり、「悪い気分」に支配された状態から、新たな「気分」が開かれていくことが期待できるような様子を見せ始めたのである。

ここで筆者は、今までとは少し異なる視点から、さらなる問いかけをした。つまり、彼の状態を問うのではなく、今、何を望んでいるのかという視点から問いかけたのである。「遠藤は何をすればよいですか」という問いかけに対し、彼は、「たのしいべんきょう」と答えた。筆者がさらに、「何が一番楽しい勉強ですか」と問いかけたところ、「おはなし」と答えた。「おはなし」とは、筆者が彼に問いかけたことに対して、彼がひらがなの文字を書くことにより言葉で答えることを称していると筆者は判断した。つまり、彼は、今、この時にしていることが、筆者の様々な問いかけに対して言葉で答えることが、最も「たのしいべんきょう」であると答えた。筆者は判断したのである。

この2つの問いかけに対して答えている時、彼の様子は明らかに落ち着き、緊張していた力も抜け、表情も柔らかくなった。つまり、「悪い気分」に支配された状態からは明らかに脱したという様子を示したのである。そして彼はついに、周りで見えていた人に対して、「めでとう」(おめでとう)というメッセージの言葉を、関わり場面を始めた時の様子とは全く異なり、非常に落ち着いた様子で書いたのである。

関わり場面での彼の様子の変化について改めて考えると、「言葉」を出すことが、一つの大きな契機となっていることに気づくことができる。つま

り、「言葉」を出すこと自体が、彼の「悪い気分」に支配されていた状態を変えて、新たな「気分」に覆われた生に向かわせたと考えることができるのである。このように考える時、「言葉」を出すという行為そのものが、あるいは、問いかけている筆者との対話すること自体が、彼の「気分」に影響をもたらすこととなっていると考えることができるようになる。

しかし、「言葉」を出すこと自体が、あるいは、問いかけに対して答えること自体が、彼の「悪い気分」に支配された状態を変えることになるのであるならば、関わりの場面の前半で筆者がさかんに口頭で彼に問いかけていた「言葉」も、あるいは、それらに対して彼が答えていた“ない”という答も、彼の「悪い気分」に支配された状態を変えることになってはいたはずである。しかし、実際には、これらの「言葉」は、彼の「悪い気分」を新たな「気分」に向けることは決してなかった。では、関わりの場面の前半の「言葉」と、後半の「言葉」とは、何が異なっていたのであろうか。

関わりの場面の前半では、筆者は彼に、「何の勉強をしますか」、「〇〇をしますか」等、この日の関わりで行うことについて問いかけていた。これらの問いかけに対して、彼は、ほぼ“ない”と答えるのみであった。考えて答えているというよりは、問いかけられたり提案されたりしたことに対して拒否をするという形で答えているようであった。これらに対して、関わりの場面の後半で、筆者は、彼の今の状態について問うた。「なぜ怒っているのか」、「何が調子悪いのか」等々、“はい”や“ない”で答えられるものではなく、自分なりに考えて言葉にする必要のある問いかけをしたのである。彼は、ここで改めて、自身の「悪い気分」に支配されている状態について、どのように調子が悪いのかについて、それが何によりもたらされているのかについて考え、実際にそれを言葉として書いたのである。彼にとって、考えたい、あるいは、語りたい内容の問いかけであったからこそ、彼は考え、答えることができた。この時点では、「悪い気分」にまだ支配されている状態であったと考えられるが、その状態であることについて説明することは、彼にとって言葉を出すために考える価値のあることだったのである。今の状態を説明するよう求められる問いかけが成立し、そ

の問いかけについて考えようとし、さらにその結果を言葉として出そうとすることは、「悪い気分」に支配されている状態においても可能であり、新たな「気分」を生きるようになる契機になりうるということが、彼の様子から示されたのである。

さらに、「遠藤はなにをすればよいですか」、「何が一番楽しいですか」という問いかけに対して、彼は、より落ち着いて考え、「たのしいべんきょう」、「おはなし」という答となる言葉を出した。ここにおいて彼は、既に、「悪い気分」に支配されているという様子を示すことはなく、落ち着いた様子を、むしろ楽しそうな様子を示すまでに至っていた。ここにおいて彼は、自分のやりたいこと、勉強したいことに注意を向け、それにより新たな「気分」を生きるようになったのである。

以上のように考えてくると、彼の「悪い気分」を変えさせ、新たな「気分」を生きるようにさせたものは、やはり「言葉」であると考えることができる。彼が、言葉を出すこと、そのために考えることが、彼の注意を新たなものに向け、新たな「気分」を生きるようにさせたと考えることができるのである。一方で、どのような「言葉」であってもよかったわけではなく、彼の状態を説明し、彼の行いたいことを述べ、他者へのメッセージを述べるための言葉を考えることにより、彼の「悪い気分」は徐々に変わっていき、言葉を考えるための新たな「気分」を生きるようになっていったのである。

以上、この日の関わりの場面での彼の様子の変化をもたらしたものを、「言葉」という視点から考えてきた。この過程を通して、筆者は、障害をもつ人の関わりの場面を担う人間として、特に「気分」についてどのように考えるべきか、とらえ直さなければならぬという考えに至ることができた。以下、このことについて、さらに考察を進めていきたい。

### 3 第三の視点：障害の重い人との関わり手であろうとする人間としてこの事例を改めてとらえ直す

関わりの場面で、「悪い気分」に支配されていた彼にとって、世界は「悪い気分」により規定され、制約されていた。身体に極めて大きな力を入れ、緊張を強くし、他からの問いかけを受け入れず、世界に働きかけようとすることもなかった。他からの働きかけは全く入らず、他への働きかけもおこらな



い、このような生き方は、決してよい生の在り方ということではできない。特に、「学び」という視点から考えるならば、このような状態において、よい学びが起こるはずもない。よって、関わりの場面においてよりよい学びを成立させたい関わり手は、「悪い気分」に支配されている状態から、少しでも新たな気分を生きる状態になれるよう努めなければならない。

「悪い気分」を直接変えることは極めて困難なことであると言わざるをえない。本事例でも、音楽をかけたり、今まで成立していた課題を提示したりしようとしたが、それらのことでは彼の「悪い気分」を直接変えることは全くできなかった。しかし、彼が文字を書き「言葉」を出すことが成立した時、彼を支配していた「悪い気分」は変わっていった。つまり、「悪い気分」に支配された生を生きていた彼が、新たな「気分」を生きることができるようになったのである。

先述したように、他者と言葉を交わすこと自体が、さらに、そのために言葉を考えること自体が、彼にとって新たな「気分」を生きるために必要かつ有効なことであったと考えられた。さらに、彼にとってふさわしい内容の言葉を考えることが、新たな「気分」を生きるために必要かつ有効なことであったとも考えられた。本事例の場合、自分の状態を説明することが必要かつ有効な事であった。単なる、「はい」、「ない」を答えるのではなく、「なぜ怒っているのか」という問いに対して答えるための言葉を考えることが、「悪い気分」を脱する1つの契機となった。つまり、それらの問いかけは、彼にとって、考えるに足る、ふさわしい内容の問いかけだったのである。

さらに、彼が何をしたいのか、どうしたいのかを考えて言葉として出すことにより、新たな「気分」を生きることができるようになったとも言うことができる。つまり、自分の希望を言葉として出すことができるのである。これらのことは、言葉を交わすことによりもたらされたのであり、かつ、言葉を交わすために考えることによりもたらされたのである。

この事例からわれわれは何を学ぶことができるのであろうか。関わり手側から言うと、相手に「問い

かける」ことの意味を、さらには、「問いかけ」に対する答を促す意味を学ぶことができる。これらのことの意味を、本事例において、「気分」という視点から改めて考えてきた。「悪い気分」に支配され、適切に学ぶことが極めて難しい状態にある人に対し、関わり手としてなすべきことは、「悪い気分」から脱し、学びが可能となる新たな「気分」を生きることが可能となるようにさせることである。本事例では、適切に問いかけ、適切に言葉を出すことを促すことにより、「悪い気分」から、新たな「気分」を生きることができるようになることを学ぶことができた。関わり手としてなすべきこととして、「適切に問いかける」ことの重要性を、改めて学ぶことができたのである。

では、「適切」な問いかけとは、どのような問いかけであらうか。言葉を出そうとして考えようとすることのできる問いかけであると筆者は考える。関わりの前半の場面でも、筆者は彼に対して多くの問いかけをした。それらの多くは、「はい」、あるいは“ない”で答えられるものであり、自らの言葉として、表現として考えることを促すものでは決してなかった。よって、これらの問いかけは、彼に新たな「気分」を生じさせることはできなかった。しかし、「なぜ」、「どうしてほしい」等の、言葉で考え表現することを促す問いかけに対し、彼は言葉で考えて答えた。前半の問いかけとこれらの問いかけとの違いを、関わり手として認識しなければならない。さらに、彼が言葉で考えて表現した答に対して、筆者はさらなる問いかけをしていったところ、彼は、これらに対しても言葉で考え答えた。つまり、彼と筆者との「対話」が成立したのである。このことは、彼に、新たな「気分」による生を生じさせるのに、充分なことであった。

他者と対話すること、そのために言葉で考えること、これらのことの意味に関わり手として考えなければならない。よりよい「学び」が可能となるための「気分」を生きるために、適切な言葉が必要であった。関わり手は、この「適切」ということの意味を考え、何が「適切」であるかを常に意識しつつ、関わりの場面に臨まなければならない。本事例から学べたこれらの視点をもちつつ、今後もさらなる関わりを重ねていかなければならないと筆者は考える。

## 注

注1 筆者との関わりの場面における彼の言葉は、口頭で出された言葉と、ひらがなの文字を書くことにより出された言葉の二種類に分けられる。本論文では、彼が口頭で出した言葉を“ ”で表記し、ひらがなの文字を書いて出した言葉を「 」で表記する。

注2 関わり開始時において、筆者は彼の視覚的能力について、極めて厳しい状況にあると判断していた。実際に、彼は、手で探りながら手を伸ばしていくなど触覚的な手がかりをもとに自らの行動をおこしていた。しかし、ひらがなの文字の学習をするようになってから、次第に、彼が見えているのではないかと筆者が判断できるような様子を見ることができるようになった。2015年9月の関わりの場面で、筆者が彼に、「目はどのくらい見えていますか」と訊ねたところ、彼は、「たくさん」と、ひらがなの文字を書いて答えた。それまでは、触覚的にはっきりと書くことのできるボールペンで書かせていたのであるが、「ボールペンの文字は見えますか」と訊ねたところ、彼は、「すこしみえにくい」と答えた。そこで、太い文字で書くことのできるマジックペンで書かせたところ、彼は、「しっかりみえる」と答えた。この時点で、筆者は、彼が、視覚的能力を有しており、それを手がかりとして諸行動をおこしているということを、明確に意識するようになった。

注3 筆者は、下記の論文において、この期間の関わりの場面における彼の生きた世界について考察し詳述した。

2007 遠藤司 「問いかけることの意味—ある一人の重障児との関わりを通して学んだこと—」(『駒澤大学教育学研究論集』第23号 pp.23-63)

注4 筆者と彼との関わりの場面の記述においては、筆者のことを「私」と記すこととする。

注5 ハイデガーにおける「不安」の思索は、あるいは、現存在が、世界の内に在って、「世界の中で気分づけられている」という思索は、本論文のテーマとするところに深くかかわるものである。しかし、本論文では、ハイデガーに基づ

いたボルノウの『気分の本質』における論を基に進めるため、ハイデガーの思索そのものについては、稿を改めて論じることとしたい。

## 引用文献

ボルノウ, O. F. (藤縄千艸訳) 1973 『気分の本質』 筑摩書房